

山東京傳作

忠臣藏前世幕興完



物總ものすんでせん前生ぜんしやうあり。提婆だいばが前生は、阿私あじ仙人せんじんにして、信玄しんげんが前生は會我かいがの五郎ごらうなり。穉蒔ひなまきの鷲じゆの前生は烏賊いかの甲かうにして、精靈しやうりやうの牛うしの前生は瓜うりの撰屑えりくずなり。初松魚はつまつういの前生は裕ゆ、茄子漬なすなづけの前生は筍たけのこ、齒磨はきの前生は房州砂ぼうしゆうさ。銅地藏どうじざうが前生は烟管きせつの雁首かりづね、風呂敷ふうりょの前生に、五月ごがつの轆おろりあれば、月見つきみの前生に八朔やっしやくの白服しろふくあり、是皆前生の因縁いんげんにして、其糸筋いとすぢをひくこと、喩たとへへば蓮根はすねの切口きりぐち、水飴みづあめの床とこばなれ、瘦地やせぢに出來た薩摩芋さつまごもにひとしく、三世さんぜ因果いんぐわの道理だうりは、彼幕無かのまくなしの戲場しばみの如く、過去未來現在すなはち是、のべつゞけの狂言きやうげんに似たりと云爾と云ふなり。

甲寅孟陬

於紙製烟包鋪

山東京傳書

物總前生あり。提婆前生ハ阿私仙人とて信玄前生ハ
 曾我の五郎とて。釋時の鷲乃前生。烏賊の甲に。精
 秀の牛乃前生。瓜乃撰屑あり。初松魚乃前生。裕
 菘子清は前生。并齒磨の前生。房州砂銅地藏前生
 烟管の雁首。風呂敷の前生。五月の幟あり。月見の前生
 小朔の白服あり。是皆前生の因縁なり。其糸筋とて
 喻蓮根の切口。水糖乃味も多し。瘦地不出來と薩摩芋は
 ひくく三世曰。早の道理ハ彼幕無の戯場の過去未
 來現在とて。是のくは狂言に似りと云ふ。

甲寅孟陬

於紙製烟包鋪 山東京傳書



兩替屋の道具、
天秤と格子の
手摺、鳥居と
玉垣のやうに
見える、

これも因縁
なるべし。

「足利直義公の前生を
尋ねるに、鶴岡邊の
商人にて、兩替屋で
人形屋を兼ね、
五月のあがり甲なども



足利直義前生

若狭之助前生

高師直前生

「此男は
一體高く
とまつて、
減すに口をきか
ず、すまして居る故、
後の世にも高い所へ
上つて黙つて
ばかり居る。」

桃井若狭之助が前生は何故だか、
丁稚にて、この猫を見
ると奇めける故、生を
替へ、師直と生れてよ
り又動ともすると
若狭之助を奇めかへず、
これ皆因果の道理なり。
「師直は前生が猫にて、
ごろにやん」と
啼きける故、皆人

にやん
ごろ
にやん

商ひけるが、生得寢坊にて
晝も一日居眠ばかりして、
何を聞いても、

たゞよし〜とばかり
いつて居る。

海馬といふ獸よく寐る故、

海馬がたゞよしと人が
渾名を附けるが後の

世に足利直義公と
生れ變りける。

「その甲も買はうよ、

こつちの甲も買はうよ。

それもかほよ、これも

かほよ、何でも彼でも賣るものを

かほよ〜といふ婆様は

誰が前生か當てゝ見な。」



かやよのぜん生

もんやんごん前生



▲このの
地口なり。
因果にも
此やうな
牽強な
因果多し。

鑑治判官の
前生は、
はんやら
はんやらな
と
まかり
木遣をいふ
薦の者なり

今此所へ 戸井へ 替の手傳 に来る。

加古川が前生は、かの兩替屋と人形屋の隣に住む本道の醫者にて、殊の外本草に精しき人なりしが、或時庭へ松を植ゆるとて、其の松が倒れ、大に怪我をする、その報にて非情の松といへども因果は免れず、後の世に本藏と生れて松の枝を切り落す。

「若狭之助が前生の丁稚、此内へ薬とりに来り
醫者の轉んだを見て無性にあはゝと笑ひし報にて、後の世には無性に腹を立つ。



かたがわお生

「ア、おしや、オ、おしや
此松奴が、おれを壁と見たかして、脊骨の下見を亂離にしました。」

總療治と出ずばなるまい。

「お前が餘り薬とりに欠伸をさせなざるから、そんなあくび災難に遇ひなざる。」

「お前が餘り薬とりに欠伸をさせなざるから、そんなあくび災難に

加古川が前生の醫者は、隣の人形屋より藥代に貰ひし小判五兩、巻紙二十本、經節一連、座敷へ並べて置きしが、師直の前生の猫、かの經節を目掛けて來りし所を捉へ、在り合ふ煙管の火玉にて、かの猫の髭を焼きしその報にて、後の世には、これに十割増の進物をしてやらるゝのみならず、師直がお髭の塵をとるなり。



猫に小判と
諭にもいふ
から、猫の
生れ替

り
師直小判が
癖ひでありさうな
ものだが、

人一倍好きに
なるとは、さりと
は意地の悪き
因縁なり。

本堂がお生

顔世御前の前生しやうの婆様、あがり甲かぶとを買つて戻らんとせしが
 老人らうじんの事故、つい踏みはづして、ほとりの深き川へ
 落つこちけるを、鹽冶の前生なる高の者、奇特きせきなる者にて、
 早速助けあげ、濡れた着物を脱がせて、我着物を着せかへて、
 うちへ送り届けゝる、されば此善根ぜんこん後の世に報いて、かのお婆は
 美しき女になり、鹽冶が妻となりける。川へ
 落ちし因縁にて深き縁となり、着物を借りし報
 にて、重きが上の小夜衣せよころもわがつまならぬ
 つまなかさねそといふ歌にて貞女を立てる、
 一河の流も他生の縁とはこの事なり。

「早野勘平が前生は
 鱸どろりと鰻うなぎを賣る商人
 なり。
 鷺坂伴内が前生は



おのれに
 さう、せぬめ
 られてたまる
 ものか。早野勘平
 ではない。あかんべいた。

勘平のお生

あんやのお生

「ヤレ／＼あぶない。
 お婆さん、お前の家は
 鰻屋かえ、道理で
 すつぽんと
 川へ落ちなすつた。」

驚なり。勘平が前生が賣る鱈を
盗み食ひし報にて、後の世には
勘平がために大きな
目に遇ふ。

目に遇ふ。

「梅ヶ枝ではないが、
三百程の鱈をせしめたから、
先の世は何にならうと、
伴内（さき）
大事ない。」

なぐんけあま



加古川が前生の醫者
 此處を通りかゝり、
 猫を抱きとめる、
 何故抱きとめたか、
 知つた人一人もなし、
 作者も知らず。

「此處では急に
 猫が大きく見える
 奴さ、人形芝居の
 虎程ある。」



もりもりとむちむち

さうだ、ア、臭い、これ
 てもおれに繪心がちつとて
 あると、大きな筆を擔いで
 「此猫は尻をひつた
 猫の尻をかゝう
 出るけれど。」

鹽冶が前生の
 鳶の者、
 人形屋の井戸
 替に雇はれ
 井戸の中より
 出たる
 鮒を持ち歸り、
 此奴を焼いて
 こながらせしめ
 んと心樂しみにして
 行く所を、師直の
 前生の猫これを奪ひ取らんと
 飛びかゝる拍子に、鳶の者の
 額へ傷をつけ、れば、鳶の者
 ほうく逃げかへる、弱い奴
 なり。されば此猫後の世に
 師直と生れても、無性に爪が長く、鳶の者の



額をひつ搔いたる報にて、今度は鹽冶に額を
 切りつけらる、鹽冶を井戸の鮒に喩へて悪口
 せしも、皆これ前世の約束事と知られたり。

「臨治が前生の薦の者、かの猫に額をひつ搔かれしが、早速薬種屋の亭主に血止薬を貰ひ、その傷癒えたる返禮として腹切金を出し、地腹を切つておごり馳走をする。」

「今看屋で大きな星蝶を見て

おいたが、まだ来ぬか、

コレ大星はまだ来ぬか、

コレ爺や、これ爺や。」

これが力彌と聞えるも悪い地口の因縁なり。

「薬師寺が前生は生薬屋にて、薦の者に血止の薬を施しけるを恩に着せ、血の出るやうな金にて

おごらせる。」

「又石堂が前生は、此草紙に女のなき故、據所なく女なり。殊にうまさうな年増にて、そのくせ堅き女故、石堂右馬之丞生れかかはる故

何事も物利かなり。

かんたむし

かまの縁



「此爺力彌が前生なり。薦の者のうちに飯炊にて、毎日

毎日お釜の前にばかり居る故、

かまの縁により、後の世に

若業姿の力彌とは

生れしなり。」

斧定九郎が前生は鐵砲河岸の新なり。とんだ手のある

新にて、おやぢをもよく殺し、多くの人に天井を

見せしその報にて、後の世に定九郎と生れ、またも

おやぢを殺し、後に鐵砲に當り死す。これ皆

因果の道理にて、道理で南瓜は唐茄子の

前生もこれで解りやした。

「與一兵衛が前生は勘平がうちの居候なり。

定九郎が前生の新に、錢五百文と縞の浴衣を

たてひきさせしが、此五百文の錢にだんく

利がくひ、五十兩二分二朱と何がしは

まけにして、あと五十兩が、

後の世に報ひ、その金高を

定九郎にせしめらるゝ。

市中きつのお生

「その中でまた反魂丹と和中散を買つて
宿六の嗅しにはむかにヤア
ならねえ。」



定九郎のお生

「わつちも人に
借りた錢だから、
返しねえよ、ア、借が敵の世の中で、
かりがなければ何のいな。」

「さきの
世で借
りたを
なすか
今貸す
か、
兎角
浮世
報は
ぬは
し。」

此歌の通り
違ひなし。

定九郎が前生の新は
 殊の外下卑藏にて、
 酒も御座れ、餅も
 御座れ、やらす
 免さぬ報にて、
 後の世に盗人と
 生れしなり。勘平が
 前世の肴賣が持つて
 來たる鰻に毒ありとも
 知らず、すでに
 買はんとする。

此傘も前生故、
 買ひたて、
 新しけれど、後の世には
 古傘となり、猪の包紙となる。

早野勘平は、
 かやの痰切と聞える故、
 飴賣でありさうなもの
 けれど、報いといふものは
 そんな地口のやうな茶な事ではなく、
 鰻、鮓、

毒ありと
 知らず
 すでに
 買はんと
 する。



「猪の前生は炬燵櫓を拵へる

職人なり。四つ足の縁と温まる

ものゝ縁によりて、後の世に猪と

生れしなり。それ故炬燵は亥の子に

開き、亥の子に牡丹餅をするも

牡丹の縁によるなるべし。

此男此ところを通りかゝりしが、

定九郎が前生の新が毒ある鯁を知らず

買はんとする故、

氣の毒に思ひ、意見をして鯁を

買はせざりし後の世に報ひ、猪に

なりかはり、定九郎が鐵砲に

當る。

籠、鯁などを賣り、

多くものゝ命をとる商賣にて

定九郎が前生の新に、とんだ萬八な

掛値をいつて籠を賣りつけよう

としたる報にて、鐵砲を放す獵人となり

又ものゝ命をとる生計をする。

「此所前生にては雪降りなりしが、

後の世にても雨降りとなる、

雪のあとでは得て

雨の降るものなり。

「此炬燵櫓賣、全體向見すな
男にて、錢を借りても返さず、
えては人をひつかけし故、
その報では手負猪にも
生れさうなものなり。



猪のあし

勘平が前生の看賣が内は煮賣屋にて、吸物にして賣らんと、一羽の雁を飼ひおきしが、おふくろは後生願故、放生會に用ゐると聞き、此雁を廉くして賣り渡す所へ、勘平が前生の男歸り來り、それを八百位に賣つては元値が切れる、是非渡す事はならぬと争ふ。「お輕が前生は雁なり。此雁に八百文身の代を渡し、放生會に用ゐるとして買つて行く御出家は即ちこれ一文字屋才兵衛が前生なり。」

あうのあは生

御料理屋才兵衛



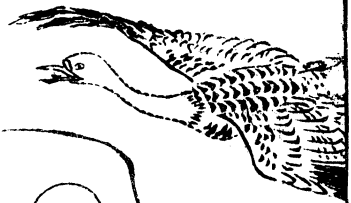
「此争ひに、あやまつて駕籠の戸が開きければ、お輕が前生の雁はつらと逃げて行き、蛇も蜂もとらせず、勘平が前生に大きな損をかけしその報にて、後の世に夫婦と生れ、勘平がために又身を賣らるゝなり。」

前生も勘平が母り故、なとも込み入つた仔細なし、こいらは作者の儲物なり。

勘平が母のあは生

「三段目にて
お輕が文を
持ち來るも
これ雁金の
因縁なり。」

「この出家、
吸物になるべき
雁を買つて放生會に
用ゐんとしたるその善根にて
後の世は佛にも生れさうな
ものなれど、かへつて
一文字屋といふ亡八屋に生れしは、
大方前生で人に金轡を
嵌められし事ありと
見えたり。」



「一文字屋をわし生」

「後の世にお輕を
載せる駕籠舟の前生は此雁を擔きし男なり。
その縁にて駕籠舟の掛聲は
雁の掛聲に似たり。」



「お年お生」

「おかどく」



千崎彌五郎が前生は勸平が
 前生の妹にて美しき娘なり。
 此娘きつい蛋たまごが嫌ひにて、
 夏になると夜つびで
 蛋ばかり殺生ころもして居る故、
 彌五郎と生れても、
 石碑が成就する迄は、
 蛋にも食はさぬ此身など、
 前生の事をいふ。
 何でもちつとかそつと
 因縁のなき事はなし。
 「與一兵衛が前生は
 勸平が前生のきつく世話になりし故、
 後の世にて、又勸平をはごくみ返す、
 これ皆因縁なり。」

勸平母お生

ふゆのお生

与一お生

「ア、穢けがない
 又反吐へどを吐く

「勘平が前生與一兵衛が前生の居候に、縞の浴衣を借り、或夜抱火鉢をして、その浴衣を焦し、どてつ腹に穴を出来しけるが、此縞の浴衣は定九郎が前生の新に借りたるを、又借にしたる物故、言譯立ち難く、わが布子の、はらわたを出してひき解となして纏ひける、此譯急には覺えられぬ程入り組みたる事故、後の世の報でも大間違となる。」

「鐵砲傷には、似たれども、

これは、まさしく綻びだらう
など、いつても、うまらぬ奴さ。」

「原郷右衛門が前生は此家の女房なり。亭主が浴衣を焦したる事を強く業腹がりける故、後の世に、ごうはらを倒に

はらごう右衛門と生るゝ。



大星由良之介前生は星の化身にも非ず、
由良鬼といふ鬼にも非ず。

昔おもへば信田の狐にも非ず、
鼈の生れ替りなり。

この鼈、勘平が前生の煮賣屋にて
吸物となる筈を、

鹽冶が前生の薦の者
親の命日に買つて、
蓮池へ放し、危き

命を助かりし故、
後の世にその恩を

報い、鹽冶の爲に
大きな忠義を
盡したるなり。

すべきものは
慈悲善根なり。



仲居の前生は豆腐屋の丁稚なり、
豆腐に縁ある
祇園の仲居に生るゝ。

「仲居お生
手の鳴る方へ、
扱へて酒飲ましよ。」

「九大夫が前生は
犬なり
後の世に
不忠な人と生れ、
方の間牒となる。」

犬がいふ
「なんと驚殿、
鼈が體で
御覽じたか。」

はじまり

九大夫お生

大星

お輕が前生の雁
駕籠を脱れて、此所へ
飛び來る。これより
籠と落雁は
のがれぬ
仲となる。

「由良之介が前生の籠は
辨才天を信仰して、
毎夜々々人靜りて、
人間の形となりて
辨天の御堂へ上り、
金燈籠のあかりを照らし、
お經を讀みしその善根にて、
後の世に智慧才覺人に傑れたる
忠臣と生れ、前生と後の世とは
籠とお月様ほどの違ひなり。」



おつらむ生

大星あは

「あとの雁が先へ
立つて貰ひしか、
何だか知れぬが、
上より弁を落す。
雁が飛べば石籠がじだんだ
とは此事なるか。」

「そこに
居やるは
おかりぢや
ないか。」

「九太夫が前生の
犬、勘平が
前生の
煮賣屋より
鮎肴を盗み
縁の下に
忍び居て
食ふ。」

九太夫あは

寺岡平右衛門が前生は山葵卸の目立なり。

それだから後の世にも平右衛門は山葵卸のやうな着物を着て居る。

此男商ひより歸りがけ、道にて

お輕が前生の雁を見つけ、

命を呉れると、出刃庖丁を

振りあげる。

滅相な男なり。

定めて菜を入れて食ふつもり

ならんが、雁にも

それ相應に羽が

生えてあるものを、

何をまごついて居るものか

忽ちつうと飛んで行く。

寺岡が前生の山葵卸目立、雁を逃して業腹まぎれ、

勘平が前生の煮賣屋へ寄り、鴨雜炊に

赤鯛といふところで飲みかけしが、九太夫が前生の犬、此男を見ると、

吠えたがるを、かね／＼憎がり居たる故、



赤鯛と鴨雜炊を食はせる振にて、
したゝか打ちのめす。

戸無瀬が前生は鼠遣ひの飴賣なり。

小浪が前生は白き鼠なり。

綿にばかり包つて居たる故、

後の世にて白小袖を着て、

綿を冠り、山科へ嫁入の

ふり賣に来る、

これ又鼠の嫁入といふ

氣取の因縁なり。

「又小浪が早く後家

となりしは、

前生にて後家張の煙管にて

打たれたる所以なり。

「鼠の鳴聲のちうといふも、

忠臣藏の世界へ生るゝ前表

因縁も色々ひつゝりひつばりの

あるものなり



本藏が前生の本章者の醫者、此隣へ引越し、
策と火吹竹を買ひ来る。これは後の世に
虚無僧となる因縁だといふのか、
さうは虎の皮だ。

本藏が前生此所へ

小便をひよぐり、内から
御無用と聲をかけるゝ。

小ぶんはせし用

戸無瀬が前生の飴賣、此處へ小浪が前生の白鼠を、押賣に來り、おまけに子の年の大小を添へてあげませうといふ。此因縁にて戸無瀬は鞆引出に大小二腰を持參して嫁入の直切こぎりをする。

「此時どういふ表裏か、棚の三寶が落ちて本藏が前生の額へ當る。この報にて此三寶後の世に本藏に踏み壞される。因縁はよくしたものなり。」

「又こゝのうちは誰がうちだか知らぬが、一體綿屋にて由良之介がうちの前生なり。いろ／＼の人が住み／＼して後の世に由良之介が佗住となる、それだから一間をあくれば綿が散らかつてゐて、雪降の如く、



本藏が前生の醫者、力彌が前生の飯炊お爺が疝氣の起りし時、鍼をうつてやるとて、横腹へ痛い針をうち込みて痛がらせしその報にて後の世にて力彌がために本藏は横腹へ槍を突込まれる、この因縁の事が棒程に報いしは、報聞えぬなり。

塗桶に綿のかゝりしは、五輪の形、
藤弓は鬮鴨居に張るといふ

雪もつ竹と見ゆるなり。

「大星女房

お石が前生は

本藏が前生の女房なり。

常々夫を尻にひきし故、

報にて後の世に

かへつて

本藏が尻にひかるゝ。

「由良之介が前生の鼈も

此所に居るが、

それはまたどういふ

因縁だといふ譯は知れず、

さう〜因縁も

こちつけ憎いと見えたり。



了竹が前生は肴賣なり。
此男藪脱なりし故、後の世に
藪醫者と生るゝ、

又おそのが前生は
鱧なり。

よし松が前生は
鱧の子なり。

此因縁にて後の世にも
子をおいて親ばかり
去らるゝ。

丁稚伊吾が前生は
鳥なり。此鳥
アホウ〜と啼きし故
後の世に
阿呆と生れる。



伊吾の生

「鳥、肴の腸を
せしめんと
謀る。」

「天川屋が前生は

此次に委しければこゝに略す。」

天川屋の生



よし松の生

よし松
が
前生
鱧の子
母の別
を
かなしむ。

「親はいらねえ、
子ばかり置いて
いきなよ。」

了竹の生

おそのの生

天川屋が前生は雨蛙にもあらず
 長持の上へのほれども
 三つ布團の生れ替り
 でもなし。
 天川屋の義平は
 男でござると
 口綺麗にいふものゝ
 實の所前生は女に違ひなし。
 「小さい子に月代さかや
 剃つてやるかみ様、
 動くなといふ人に生るゝ。
 「遣手ちかては後の世にも
 やつぱり捕手に生るゝ。
 「前生のむいにて蚤を取りし男
 無性に捕つたゝと
 いふ人に生るゝ。



天川屋の義平

雑道具

「前生なまにて菜を
 茹てゝ掻き廻
 したる下女
 腕まはせ
 エ、と
 いふ人に生
 るゝ。」

六十一 辰目お生

「具足開の餅を
鼠金槌にて碎き
食つたる男
具足櫃へ掛矢
打ちこまれる
人に生れる。」

「燕、梁の上へ
乗つて逃げる人
に生れる。」

「虚無僧、播鉢を
冠り、播小木を
持つて逃げる人に
生れる。」

「やすい役者の
お冷飯になつた奴
首を切られる
人に生れる。」

「此兩人
利いた風
に本藏と

「菩薩を鹿末に
したる飯炊女
盲に生れ、
禪を
引き
ずつて
逃げる。」



女の手から物を
とれる出家は、
五百生がその間

手の無き者と

生るゝとかや違ひなし、

女の手から手切金を

とつたる出家は、

手を切らるゝ人と生れる。

「勘平が前生で

賣つた鯨おたふくに生れ

行燈を

さげて
逃げる。」

平右衛門
の風をして
ゐる奴さ。

此女
と此
男は、
忠臣藏の
外へ生
るゝ

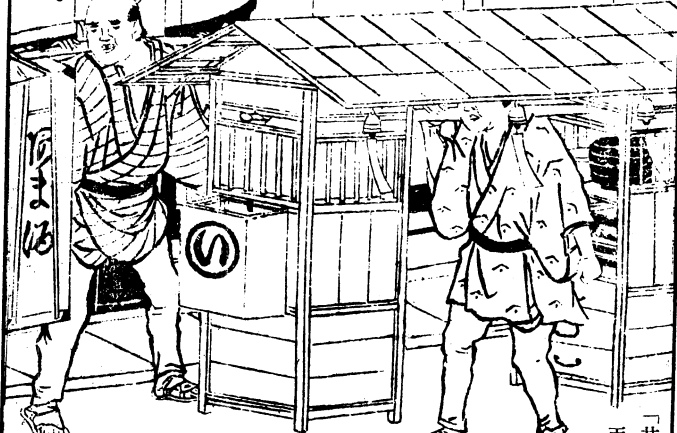
故、
いさ
なく
なし

前生にて酒を買つた人
後の世には尻を切られる人
生れる酒を買つて尻を
切られるとは、たとへに引く
程あつて割に合はぬ因縁なり。

心太賣
拍子木
うつつ
夜番に
生るゝ。



扱夜討の面々の前生を
 委しく尋ね奉るに、
 噫の咒に湯を飲んだる人
 才文字の槍を持ち、竹の子
 穂の所ばかり好いて食つたる人
 階子を持ち、
 才鈍頭の人掛矢を携ゆる。
 しかしながら大鷲文吾は
 大橋豊後と聞ゆれども
 兼太夫にも非ず。
 竹森喜太八は
 かけもり伊太八と聞ゆれども、
 蕎麥を食ひながら新内節を
 聞いた人にも非ず。矢間十太郎は
 いかさまさうだらうと聞ゆれども
 尤な人の生れ替りでもなし、
 報にもさうく牽強ばかりもないと見えたり。



「甘酒を賣つたる人
 天とかければ、
 紐革餛飩を
 商ひし人
 川と答へる。」

「夜討の面々
 多くは
 籠籠屋の擔の
 生れ替りにして、
 呼子の笛を
 吹きし面々は、
 多くは
 按摩の
 生れ替りなり。」

「師直が前生の猫
鯛の頭を盗み、
薪部屋の隅にて
してやりし報にて、
後の世に師直と生れ、
つひに薪部屋にて
首をとらるゝ。」

「一體

忠臣藏の正本でも

十一段目は

至極筋が荒き故

前生も

このところは

よつぽど

手拔が

見えるなり。



「此手合皆
夜ばかり
稼ぐ手合故

夜討の人衆に
生れし
なり。
因縁と
いふもの
至極理詰な
もの
なり。」

そもく歌舞伎狂言、
操淨瑠璃の類、

すべて作者の腹に

過去未來現在の

三世籠れり。

いまだ案じ

つけざる前は、

右にしるせる如き前生にて、

埒口もなし。

漸く案じつけはじめて

作者の腹より出づる。

これ即ち現在なり。

或は二番目、三番目、

後日の淨瑠璃を出す、

これまた

未來なり。



京傳

紙煙草入見世殊の外繁昌仕り、

誠に御最良御蔭故と、朝夕

いづれも様のおかけを拜し、

しばしも忘れ申さず候。

なほ又來る四月朔日より



裂地夏煙草入

めつきりよき品

賣り出し申候

相變らず御最良奉希上候。

一つ祝ひませう。

めでたし。

此所は假名手本の作者

竹田出雲が腹より師直鹽治

はじめて生れ出でたる所なり

これより忠臣藏のはじまり。

京傳作

無幕世前藏臣忠